

# 「ジャワ」から「インドネシア」へ

——インドネシア・ナショナリズム再論——

## はじめに

東南アジアの国民国家 (nation-state) のなかでインドネシアが際立った大国であることは周知の通りである。面積・人口ともに東南アジア全体の4割を越え、「サバンからメラウケまで」と誇示される東西の距離は5000km以上に達している。

国民国家としてのインドネシア共和国が成立してからすでに40年が経過した。その間に統一インドネシアの分割ないしそれからの分離独立のころみはいくつか存在したが、いずれも実現しなかった。逆に、国民国家の枠組はますます強化されてきた。このことは、現代世界が国民国家の時代であること、したがって現代世界の構成単位として国民国家が強靱な持続性を有していることを明示している。

インドネシアという国民国家が成立する上で決定的であったのは、次の二つのことがらであった。第一は、インドネシアが旧オランダ領東インド（東インド植民地国家）の領域をそのまま継承して成立したことである。第二は、国民国家の創出をめざす運動（ナショナリズム）が、たとえばジャワ・ナショナリズム、バリ・ナショナリズム、ミナンカバウ・ナショナリズムとしてでなく、その当初から、インドネシア・ナショナリズムとして成立し展開していったことである。この限りでみると、インドネシアは植民地支配とナショナリズムを両親として誕生したのであり、植民地ナショナリズムの典型的な型をしめしている。

とはいえ、「多様性の中の統一」を国是の一つとして掲げるほどに広大な空間と多様な社会・文化を包含しているインドネシアにおいて、これらの多様な

地域がインドネシアへと変容していくプロセスは決して一様ではなく、地域ごとにその様相を異にしていることは当然である。ことに、これらのプロセスにおいて何を重要な変容のファクターとして考慮すべきであるのかという問題は、それぞれの地域ごとの独自の社会と文化と制度のあり方から切り離すことはできない。それは場合によっては、変容のプロセスを共通に測定する基準をはたして設定しうるのか否か、という問題を導き出すことになるはずである。

本稿の趣旨は、以上に述べてきたことがらを念頭において、インドネシアの中からジャワをとりあげ、「ジャワ」が「インドネシア」へと変容していくプロセスを概観することである。ここに「ジャワ」の意味は二重である。第一にそれはジャワ語を母語とする人々すなわちジャワ島中東部を中心とするジャワ族の世界を意味し、第二に植民地時代と現代とを問わずインドネシアにおいてもっとも重要な政治的・経済的役割を果たしてきた空間としてのジャワ島の全体そのものを意味する。このように、本稿においてジャワという語が二重に用いられること・二重に用いられざるをえないことは、後述する通り、「ジャワ」から「インドネシア」へとという変容のプロセスそのものにかかわっていることがらなのである。次に「ジャワ」から「インドネシア」へと変容するとは、その変容のレベルをどのように設定するかによって、多義的にならざるをえない。さし当り、「ジャワ」という観念と心理にかかわって（もしくはそれが成立するのにあいともなって）それとは別の新しい観念と心理が誕生し、それが次第に（もしくはそれが同時に）「インドネシア」という「時代精神」として共通にイメージされること、そして、この「イメージの共同体」[Anderson 1983: 14-16]を獲得し構築し制度化するためのこころみが出現することである、と規定する。なお以上のことがらを考察する際に主要な時期として設定されるのは、ジャワ島に新しい植民地空間が成立する18世紀の半ばから、インドネシア・ナショナリズムが自己増殖的な再生産の段階に到達する1910年代までの約1世紀半の期間である。

次に、このような変容を本稿で取り扱う際の視角と主要な論点は次の通りである。第一は、ジャワの王権とその変容を植民地国家との関係およびナショ

ナリズムとの関係において論ずることである。ジャワの王権はインドネシアの各地域に成立してきた伝統的権力の中で、植民地支配下においてなお例外的に存続したのみならず、その完成度（なかんづく文化的完成度）において屹立していた。それにもかかわらず、20世紀のナショナリズムの時代において、ジャワの王権がたとえばジャワ・ナショナリズム（ジャワ人によるジャワ国家の創出をめざす運動）を生み出す喚起力となったり、ジャワ・ナショナリズムが直接にそこへ向って収斂していく求心力となることはなかった。それは何故か、ということを変更して問うことは、王権の変容ということがらを中心にして、一方でそれと植民地権力との関係、他方でナショナリズムとの関係を定置する作業が求められるのである。概していえば、従来までのところ、インドネシアの「正史」と国際的なアカデミズムとを問わず、ジャワの王権は、19世紀までのジャワの権力編成と配置の問題として現代史から遠ざけられるか、もしくは、ジャワの伝統的文化の問題として文化研究・古典研究のカテゴリーに封じ込まれるかのいずれかであった。その結果、19世紀と20世紀との深い断絶が、共和国とアカデミズムとを問わずに共通の前提として受け入れられ、「知の伝統」と化してきていた。このような了解そのものを再検討しようとするためにもこの王権をめぐる問題は、「あらためて問う」べきことがらであると思われる。

第二は、19世紀の半ば以降に顕著になるジャワ島の社会変化を「ジャワ」から「インドネシア」への変容という文脈に定置することである。上に述べた通り、19世紀と20世紀の間に断絶があるという認識は、インドネシアの現代史とくにナショナリズムの発展史を記述する多くの文献に、ほとんど一様に認められる。オランダ植民地政府の公文書とインドネシアの「正史」とアカデミズムの生産する研究とを問わず、現代史の記述の起点を今世紀の初頭における「倫理政策」とそれに呼応して出現する原住民知識人や団体（典型的にはカルティニとブディ・ウトモ）にすえるのが一つの「伝統」となってきた。その前提にあるのは、その時期にインドネシアの近代が始まるという共通の認識であった。従って、19世紀は近代の「ヒカリ」がまだまだ到達することのない「ヤミ」の時代であるとみなされてきた。だからこそ、19世紀までの歴史は植民地政策の変

遷史、なかんずく経済政策の変遷史として描かれるか、もしくは先に述べたような王朝の興亡史（これが植民地の発展史もしくは侵略の拡大史と表裏一体をなしていることはいうまでもない）ないし王朝の文化史として描かれるのがつねであった。それが20世紀になると、あたかも主人公が突如として交代するように、ナショナリズムが登場するのである。しかし19世紀と20世紀はこれほど截然と分ちうるのであろうか。植民地の文書からもれ（それゆえ、アカデミズムの視野に収めにくく）、ナショナリストの主要な関心からもれていくことがらのなかに、「二つの時代」と「二つの世界」を結びつけているものがないであろうか、というのが本稿の論点である。それを、組織・運動・事件とこれらを書きとめる文書およびこれらの文書（それが植民地官吏の手になるものであるとナショナリストの手になるものであるとを問わずに）の連鎖ないし再構成によって作りあげられる政治史の領域を拡大すること、もしくはその領域を開放して広い社会変化と文化変容を視野に入れることによって、換言すれば、社会過程に錘鉛を下ろすことによって考察してみようとするのが本稿の視角である。

とはいえ、これらの二つの考察の対象は、いうまでもなくそれぞれに多様な問題を含んでおり、いくつもの個別具体的な研究を要請するものである。本稿の趣旨は、その変容のプロセスについての見取り図を描くことによって、それぞれに問題とされるべき論点を提示することである。<sup>1)</sup>

## I ジャワの王権とその変容

### 1 ジャワの王権

歴史的にみるとインドネシアには二つの王権の伝統が認められる。一つは河川や河口の交易の要衝に成立し海域世界のネットワークへの参入によって基礎づけられた王権である。何者の所有にも帰すことのない従ってすべての者に開放されている「一つの海」“the single ocean”<sup>2)</sup> という伝統がこの海域世界には成立していた。この「海の世界」では、人・物・言語・情報・文化が環流し、これらの環流の「結節点」に成立した王権は人・物・言語・情報・文化が交差



し交流する窓口であった。一方、これらの王権の物的基盤はその時々限定的な財の交流におかれていたから、「一つの海」が財の一方的篡奪者＝「海賊」を含めてたえず新規の参入者を迎え入れるということがらとあいまって、王権が長期に安定的に維持されることはなかった。その意味で、「海の世界」の王権（ムラユの世界の王権）は、開かれた体系・自己非完結的な体系を示していた、といえよう。

これに対してジャワ島深南部（「ジャワ核域」）の独立火山峰の山麓に成立したジャワ族の王権は、稲作生産に基礎づけられた王権の伝統を形成してきた。そこは豊穡な稲作社会の中心であるとともに、「海の世界」を窓口として流入してきた王権思想が長期に安定的に定着する空間であった。ジャワは稲米儀礼を核とする自然と人事への繊細な関心が王宮に向けて求心的に収斂する世界であり、王宮は「宇宙的秩序」を創出し維持する主宰者であった。その意味でそこに成立したのは「野の世界」の王権の伝統であり、そこで示されたのは閉ざされた体系・自己完結的な体系であったということができよう。<sup>9)</sup>

ジャワの王権は紀元後8世紀から13世紀頃までの間に中部から東部へ向ってそのセンターを東漸させていった。ところが13世紀末になるとその中心はジャワ島東部の農業地帯から一気に北上してジャワ海の河口部へ移行してマジャパヒト王国の成立をみることになる。それは13世紀末に至ってジャワの王権が先の二つの伝統を包摂する王権・強力な物的・人的資源に基礎づけられた王権へと発展したことを示している。「多様性の中の統一」“*Bhinneka Tunggal Ika*”の標語がもともとマジャパヒトの時代に由来するように、多様性の統一とは先ずもって「海の世界」と「野の世界」（王権の型でいえば「ムラユ型王権」と「ジャワ型王権」）の合一化を意味しているのである。

ところで重要なことは、この強力な王権が遠征と制圧、支配圏の拡大と確立を実現し保障する強力な軍事集団として先ずもって機能していたことである。このような強力な王権は、その後3世紀を経て、イスラムの流入と戦争と小王朝の興亡と文化的伝統の破壊・断絶ののちに、16世紀末に至って、マタラム王権において再度継承された。マタラム王権はその中心をあたかもジャワ王権の故

地に帰還するかのようにジャワ深南部の「マタラムの地」においた。そのことは、マジャパヒトの場合とは逆に、「海の世界」の王権（この場合イスラムの王権）がジャワ北岸の河口部から上ってついに「野の世界」の中核を押さえたことを意味していたのである。

マタラム王権の変容を以下に概観するのに先立って、次の二つの点を留意しておきたい。第一は、マタラムの成立する16世紀後半以降、西欧植民地勢力がインドネシアの各地に拠点を確立し拡大していったことである。16世紀以降のポルトガル、17世紀以降のオランダ（副次的にイギリス）の勢力拡大はインドネシアにおけるイスラム王権の勃興期（典型的に16世紀以降のアチェ王権の台頭と17世紀前半のマタラムの拡大・バタヴィア城攻撃）と軌を一にしていたのであり、各種の勢力がせり合う状況が出現していたのである。第二は、西欧の勢力拡大が、「一つの海」の伝統の解体（「海域世界」の主要なネットワークの独占化）とこれにともなう「海の世界」の王権の伝統の解体（要衝地点の掌握と支配）として、従って「海の植民地化」として進行したことである。このような植民地化の過程は、ジャワを除けば、19世紀半ばまでインドネシアの各地域において一般的に認められたのであり、領域の包括的支配を中核とする植民地化が進行するのはそれ以降のことであった。しかるにジャワだけはすでに17世紀の前半からオランダ勢力の内陸部への拡大とこれにともなう領域支配の過程を経験したのである。

## 2 王権の変容

1578年頃に成立したとされるマタラム王権は17世紀の前半までにその支配圏をジャワ島西部と東端部を除く全域に拡大した。その後は内紛とオランダとの抗争をくり返し、1755年にはジョクジャカルタとスラカルタの二王国に分裂、1757年にはスラカルタからさらにマンクヌガラ王家が分立し、越えて1813年にはジョクジャカルタからパクアラム王家が分立して、四つの小王国が並存することになった。この過程で王権はどのように変容したのであろうか。約言すれば、この過程で王権は戦闘集団の主宰者から「模範的中心」としての王宮へ

と変容していったのである。

ジャワに成立した王国の性格が研究対象としてとりあげられそれが論ぜられる場合に、一般に二つの典型が認められる。第一は王国の性格を王権維持の構造や支配圏拡大の態様を通して示そうとするもので、多くのジャワ史の研究書が示すように、そこでは王朝の歴史は戦闘集団の制度化（戦闘と遠征と王侯貴族の通婚圏の拡大）とその崩壊（王位継承をめぐる内紛と地方反乱と対抗勢力の台頭）の歴史として示される。あるいは王権維持の構造に着目して、婚姻のネットワークを基礎とする家産官僚制として示される（たとえば Schrieke [1955: 1957]）。第二の典型は、Heine-Geldern によって定式化され [Heine-Geldern 1942], C. Geertz によってあまねく流布された [C. Geertz 1968 ほか] 典型で、王国がそのセンターである王宮によって定義され、王宮が「模範的中心」“Exemplary Center” [Geertz 1968 : 35-43] であったことに力点をおくものである。これが、考察の主たる対象を文化パラダイムにおいていることはいうまでもない。

これら二つの典型は、同一の対象に対してどの局面に注目するのかというアプローチの相違を反映していると考えすることは、一見妥当な理解のように思われる。たしかに、ジャワの王は、一方で、「宇宙の主宰者」[土屋 1982a : 32-52]の意志のこの世における体现者、宇宙的秩序の源泉という理念上の王の完璧性を体现するものであり [S. Moertono 1968; B. Anderson 1972]、他方で、現実の最高権力者としてその権力の維持に腐心するものである（たとえば M. Ricklefs [1974:22 passim], O'Malley [1977:163, 201n-202n]）。そしてこれら二つの要請は、それぞれに困難な要請であるだけでなく、しばしば相矛盾し相互に対立する要請であったから、それがジャワの王権それ自身への脅威となっていたのである。このような王権の在り方に対して、王権の前者の機能に着目すれば先に述べた第二の典型が王・王国の性格として論ぜられ、後者の機能に力点をおけば第一の典型が論ぜられることになる。

しかし、このことをマタラム王朝の歴史にてらして考えれば、実は、マタラムそれ自身が 1755 年の二王国への分裂を決定的な展開点として、戦闘集団から「模範的中心」へと変容し、王宮が「模範的中心」としての役割を自覚的に

演ずることになったといえるであろう。すなわち、マジャパヒト王国の崩壊時（この王国は1294年に成立し1478年頃に滅んだとされる）からマタラム王国の分裂に至る約300年に及ぶ期間のジャワ島中東部は、たえざる戦乱の渦中にあり、この長い期間、王と王権は先ずもって戦争・遠征・内乱と反乱の鎮圧を主たる任務とする戦闘集団として機能していたとみなしうるのである。何よりも顕著であったことは、「模範的中心」として機能すべき王宮が頻りに破壊ないし放棄されたことである。マタラム成立後からその分裂に至る約180年間においてもっとも長期間にわたって王宮がおかれたのはスラカルタ西方のカルタスラであった（1680～1743）が、この約60年間においても、王宮はスロパティの反乱（1686～1703）、王位継承をめぐる戦乱（1703～1708、1718～1723）、バタヴィアでの中国人虐殺を契機とする大動乱（1740～1751）によって軍事的に脅かされつづけ、ついには反乱軍の手中におちた（1742）のである。

このような過程で18世紀後半以降のジャワの王権の性格を規定することになる二つのことがらが進行していった。第一はマジャパヒト時代までに形成されていたジャワの文化的遺産と伝統が徹底的に破壊されたことである。この破壊（従ってジャワ文化の非連続性）は、イスラムによるヒンドゥー・ジャワ文化の破壊という形で進行すると同時に、否それ以上に、マジャパヒトの故地である東ジャワおよびジャワ王権の富の源泉であるジャワ島北海岸地域・海に向って開かれた港湾拠点（いわゆる Pasisir 〈沿岸〉地帯）の支配権をめぐる恒常的な戦乱状態がイスラム勢力同士の間で作られていたことに起因していた。だからこそ、18世紀の後半からマタラム分裂後の各王家で始まる「ジャワ・ルネサンス」（後述）は、文字通り、今や喪失された古の文芸を「復興」するものとして行われたのである。

次に第二のことがらは、王権とオランダの関係に直接にかかわることがらである。それはオランダ（当時においては東インド会社、VOC）が、バタヴィアの周辺部から Pasisir 地域へとその勢力圏を拡大する一方で、中ジャワで繰り広げられる権力抗争の第三の当事者としての役割を次第に強化していったということである。この役割の強化と VOC の勢力圏の拡大とは、いうまでも

なく軌を一にしていた。VOC の軍事力が抗争勢力の一方に加担する（この加担は、通常、抗争勢力のいずれかがバタヴィアに拠点を置く VOC に対して援助を求めることの結果生ずる）というパターンは、アマンクラット 1 世（マタラムの創設者セノパティから数えて第 4 代目の王、在位 1644～1677）の死の直前から開始され、それ以降は、マタラムの王位継承をめぐる内紛と抗争に際しての常態として進展していった。そして、その都度マタラムは VOC に対して膨大な戦時負債を負うことになった。負債はマタラム領土そのものの割譲と農産物の供出と貿易特権の移譲の形をとり、マタラムは自らの富の基盤を次第に喪失していったのである。

VOC がマタラム王権にかかわる政治主体としての役割を強化していくというこの過程は、1755年のマタラム分裂、殊にその結果としてのジョクジャカルタ王国の創設において一つの頂点を迎えた。そしてこの分裂こそジャワ王権の歴史を画するものであり、また、王権の変容に関して決定的な転回点となった。それは次の二点において画期的であった。第一は、ジョクジャカルタ王家がマタラム王権の委任を受けた VOC と反乱軍のリーダーの間に関わられた条約によって成立したということである。ギヤンティの和議と呼ばれるのがそれであり、条約は 1755 年 2 月スラカルタ近郊のギヤンティにおいて、VOC を代表するスマラン駐在の VOC 北部ジャワ東北沿岸州長官（1748 年以降設置）の Nicolaas Hartingh とスルタン・マンクブミ（Sultan Mangkubumi、後に Sultan Hamangkubuwana 1 世〔在位 1749～1792〕としてジョクジャカルタ王家の創設者となる）の間で交わされ、ジャワ語とオランダ語で記された。ここでは VOC がマンクブミに対してスルタン・アグン（Sultan Agung、在位 1613～1645）以来のスルタン称号を授与すること、マタラム王国の所領の半ばを与えること、一方スルタンは年額 1 万リアル（スペイン・ドル）の収入とひきかえに Pasisir を VOC に譲渡すること、また王侯領の首相（Patih）の任命と解任は VOC の同意の下に行うこと、を骨子とする条項がもりこまれていた。さらに両者の会談では、新たにマンクブミの支配下に入る「世帯」（Cacah）数が 8 万 7050 と定められ、スラカルタ（すなわちマタラム王国からジョクジャカルタ王国をさし引いて形成された王

国)のそれが8万5450と定められ、それぞれの「世帯」数に見合っ<sup>て</sup>マタラムの領土は二分された。<sup>4)</sup> このように、ギヤンティ条約においては、VOCこそが王位の称号を賦与し王国の外縁を定義する主体であった。条約締結行為の主体がVOCであること、王国の外縁が明確な可視の数字として確定されたことにおいて、1755年のマタラム分割はジャワの王権がオランダによって創出され・維持されるという時代の幕開けを告げたのである。

第二に重要なことは、この結果、おのおのの王宮と家臣団と領土を有しその所領を近接させる二つの(中には四つの)王家が中ジャワの南部平原に並存するに至ったということである。現実<sup>に</sup>にジョクジャカルタとスラカルタは六十数キロの距離を隔てるにすぎない。これらの王家は、政治的には相互に反目と敵対を繰り返しつつ、また、そのすべての場合にオランダの調停と裁可を仰ぎつつ、そしてそのつど政治的な力をオランダによって剝奪されていった。その結果として、ジャワの戦乱はやみ、王権は「模範的中心」としての機能を特化させていくことになる。それは、王宮を中心とする文化が極限にまで内向的に展開するところにもっともよく示されていた。

以上の状況を約言すれば、それはオランダによってジャワの王権が「封印」される状況であった。それは以下の諸点を意味する。第一はジャワの王権はもはや空間的に拡大する途が閉ざされ戦闘集団としてのポテンシャルティを喪失したこと。第二は各王家の内部と王家の間とを問わず、紛争ないし紛争の危機が生じた場合、オランダはつねに現状を維持する方向(4王家の外縁の固定化)で裁可者として機能したこと。第三はオランダのこの機能は王宮内部ないし王宮間の政治的配置図をオランダが決定する(王位継承者の承認と首相の人事権の掌握がその根幹をなす)方向で、時代の進展とともに強化されたこと。こうして、オランダに反抗する王族は王宮から排除された。図1にかかげる19世紀前半の王位の頻繁な交代ないし在位期間の短さがこのことを明示している。バク・ブオノ6世(在位1823~1830)のように、ジャワから追放される王も現れた。第四は、これらの過程においてジャワとオランダの彼我の軍事力の差はますますあらわとなり、その物理的強制力と複数の王家の並存という状況がこの「封

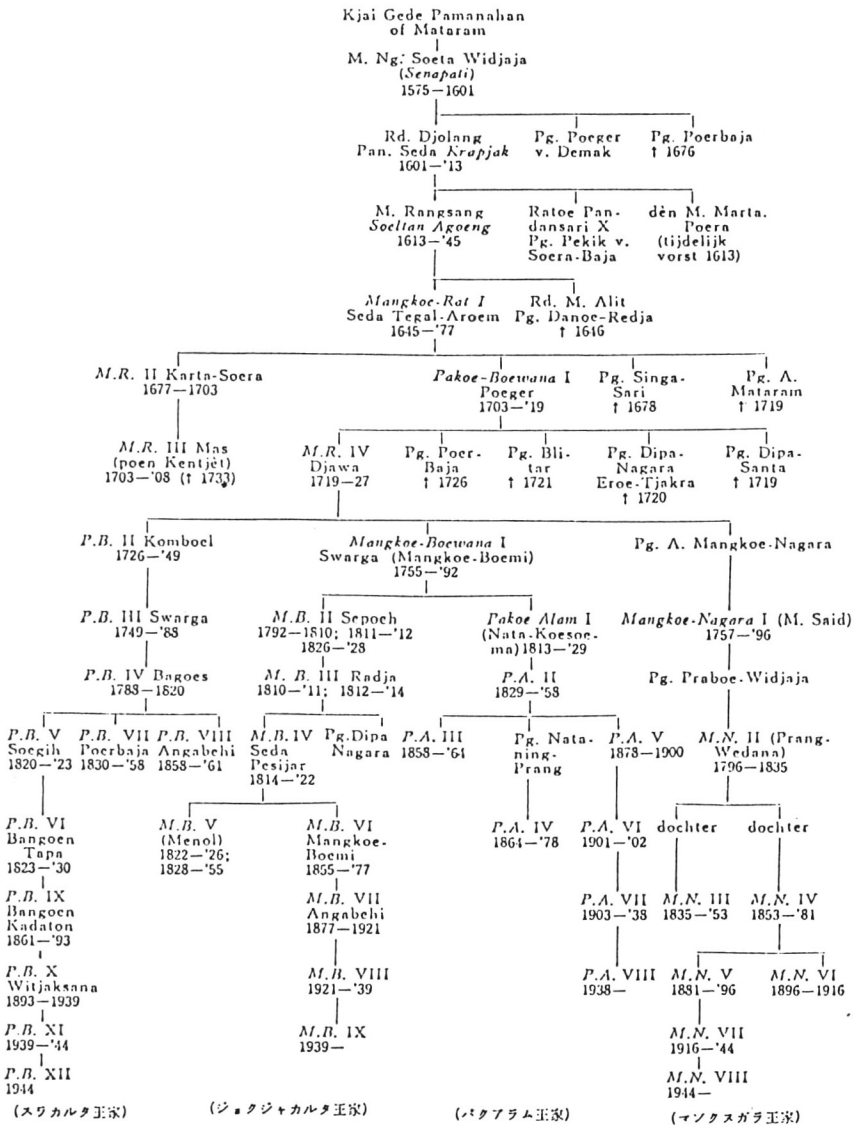


図1 マタラム王国の系統図

印」を保障したこと。

すなわち、ジャワの王権は18世紀半ば以降政治権力としてはますます無力化し、政治権力（なかならず戦闘集団としての機能）としてまさに無力であることにおいて、その存続を保証されてきたのである。1830年から1849年までの長期間アンボン島に流刑されたパク・ブオノ6世の配所での生活を綴った『バングン・トポの書』に明瞭に認められるように、オランダはジャワとジャワの王権を囲繞して天地に満ちていた。そして、配所からはるかに「遠い」(adoh)スラカルタの都を「思慕する」(oneng)王の眼は、そのまま、もはや歴史的に喪失されたジャワの王権の栄光を追憶する末期の眼であったのである。<sup>5)</sup>

### 3 王宮文化と「ジャワ学」

ジャワの王権は以上に概観したように政治的にはますます無力化していったが、その過程は王権が文化的活動に特化し、文化の唯一のセンターとしての王宮の機能が異様に肥大化していく過程であった。先に述べた本稿の視角からみて重要なのは次の二点である。

第一は「ジャワ・ルネサンス」の競合ということがらである。マタラムの分裂と分立した王国の外縁の固定化によりジャワの中東部における大規模な戦乱の時代は終息した。その後、1810年からほぼ20年間、パクアラム家の分立とディポネゴロ戦争(1825～1830)によって中ジャワは再び騒擾の渦中に入ったが、1830年以降は先に述べた「封印」の状況が一層進展し、ジャワは文字通り「静謐」の時代を迎えた。このことと軌を一にして、1750年代後半から1800年代初頭に至る半世紀間と1830年以降のジャワの各王国では、王宮文化が開花した。そこでは各々の王宮がそれぞれに「模範的中心」として機能することになったが、そこで意図されたのは「古のジャワの理想型」を再生させることであった。「古のジャワ」の再生とは、マジャパヒトの崩壊以降の戦乱の時代、ことにスルタン・アグンの遠征をアンチクライマックスとして破壊された文化的伝統を、ジャワ文化の正統な「かたち」として再現してみせることであった。この場合に顕著であったことは、複数の王宮すなわち複数の「模範的中心」が



並存し、しかも、これらの王宮間をめぐる情報の流通がますます頻繁になることによって、文化の様式が競合的に創出されるという状況がもたらされていたことである。<sup>6)</sup> この競合は様式の細部における微妙な差異として示され、この差異は時とともに進展した。

18世紀後半以降のジャワの王権は、このように、それぞれが「ジャワ文化の再生」の担い手であることを主張し、おのおのが「模範的中心」の創出をこころみたのである。それは、政治権力が無力化するのにあいともなって王宮文化が内展していくことを意味していた。

各王宮はそれぞれに「真正」「asli」な様式を作り出した。それは、踊り (beksa)、歌謡 (tumbang)、ワヤン (ワヤン人形の形姿とその演出)、家臣団の衣裳、王宮儀礼のフォーム、パティックの紋様と色調等、およそ人間集団の観念と心理とが表出されるすべての領域に及んでいった。この中で「模範的中心」としての王宮の正統性を証する上でもっとも顕著であったのは、言語による秘義の創出、すなわち「年代記」(babad) や「物語」(sèrat) を作成するという営為であった。これらは18世紀の後半以降各王宮で数多く記され、それぞれに王家と王宮にとって「聖なる遺産」(pusaka) となった。「ジャワ・ルネサンス」はこのような文芸活動によってその頂点をきわめたのである。この時代からは、ヨソディプロやロンゴワルシトやジャエングラットのよう<sup>プジャヤンガ</sup>な「宮廷詩人」(pujangga) が生まれ、「古のジャワ」を言語活動において再生する営為の中心的役割を担ったのである。そして、「模範的中心」としての王宮の存在を最終的に保証していたのは、ジャワ語という言語空間であり、18世紀以降のジャワ語の展開のうちに、「範型」としての王宮、従ってこの王宮に求心的に形成されることになる支配の内向性ということがらは、もっとも見事に制度化されていったのである。ここにいうジャワ語の展開とは敬語体系の著しい内展、すなわち、クロモという「優雅なジャワ語」とンゴゴという「粗野なジャワ語」の二重性が話し言葉のすべての領域で間断なく意識され、この二重性が機能することを意味している。ある特定のレベルのジャワ語をある特定の局面で適切に選択してそれを誤りなく用いること、また、その特定のジャワ語が特定の所作 (表情、身振り)

を自ずからに規定する（言語と所作が一つになる）こと、それが話し言葉としてのジャワ語の特性である。そして、使用可能なものとしてストックされた言語レベルが多岐に及んでいるほど、その言語空間は王宮に近く（「優雅」である）、そのストックが乏しいほど王宮から遠い（「粗野」である）という了解が成立している。この意味で、「模範的中心」としての王宮は先ずもってジャワ語の言語空間の中心であった。<sup>7)</sup> そこでは、「ジャワ人になる」とは、ジャワ語を正しく使えるようになることと同義である、とされたのである [H. Geertz 1961 : 105]。

このようなジャワ語のあり方とくにクロモは、すぐれて歴史的に形成されたものであり、きわめて人工的であったといえることができる。それは、宮中言語として生れ、「年代記」等の書き言葉の中で展開し、ワヤン劇の上演と官僚制の浸透にともなって王宮外へとひろがり、さらに、19世紀末以降は、西欧的教育制度の成立にともなってジャワ語の教科書と教師によって制度的に担われた。ジャワ語の言語空間の成立は、このように、18世紀以降のジャワの王権の変容と直接にかかわっていたばかりでなく、実は植民地政府の施策とも切り離しがたく結びついていたのである。<sup>8)</sup>

ジャワ王権の変容を植民地国家およびナショナリズムとの関係にてらしてみるときに第二に重要なことは、19世紀以降次第に制度化されていくオランダアカデミズムの役割である。約言すれば、ジャワの言語と文化と歴史を対象として展開されたオランダアカデミズム（それは「ジャワ学」Javanologie と総称される）の成果こそ、ジャワの王権とナショナリズムとの関係のあり方を規定する連結環の役割を果たしたのである。「ジャワ学」の成立とその展開の様相について筆者はすでに別に論じた [土屋 1984 a] が、その要点を略述すれば次のようになるだろう。

(1) 「ジャワ学」はジャワ語辞典の編纂事業から始まる。すべてのジャワ語が蒐集されその一つ一つがオランダ語によって意味を与えられ定義されるという辞典の編纂事業は「ジャワ学」の性格をもっとも良く示している。すなわち、「発見し・蒐集し・整理分類し・解義する」という知的行為を制度化していく

ことである。これらの成果はいうまでもなくオランダ語によって公表され、広く公開され、オランダ語という窓口さえ通れば、何人でもその成果に接近しうる。このようにして「ジャワ学」の伝統が形成されていくのである。このような「ジャワ学」の中でジャワ学者がもっとも情熱を注いだのは、ほかならぬジャワ古典古代の歴史・言語・文化の研究分野であった。「ジャワ学」とは基本的にジャワ古典研究であった。すなわち、18世紀以降のジャワの王権が「古のジャワ」を再生するのとまさしく対応して、「ジャワ学」は「古のジャワ」をまったく別のパラダイムにおいて解義し解明しようとしたのである。

(2) このことは、「ジャワ・ルネサンス」の担い手である王宮とプジャンガが、ジャワ学にとってもっとも貴重な研究対象であったということの意味している。それまで、王宮はジャワ語の書き言葉の世界の排他的な主宰者であり、とくに、文字を書き記すという行為に直接関与するプジャンガはその世界の伝統の排他的な継承者であった。彼らは王をパトロンとし王と王国の故事来歴を顕賞する物語の創出者であり、現実の王国と物語の王国とは一つに重ね合わされていたがゆえに、物語を創出するというこの行為は、宇宙の秘蹟に通じ人の世の定めや行く末を透視しうる「聖なる力」の発現としてみなされた。このようなジャワの知の世界こそ、「ジャワ学」の知的関心をやみがたく喚起するものであった。19世紀半ば以降の「ジャワ学」の展開の過程に認められるのは、プジャンガにとってのパトロンが王と「ジャワ学」の碩学の二重になる過程、かくしてプジャンガが「ジャワ学」にとってのインフォーマントと化していく過程である。この過程の前提をなしたのがオランダ対ジャワの王権の政治的・経済的な優位の差が一層拡大していくという状況であったことは、いうまでもない。この過程で、ジャワ語を定義し（辞典の編纂）ジャワ史を再現し（碑文研究、古ジャワ語研究）ジャワ文化の輪郭を描く（年代記研究、ワヤン研究、儀礼研究）というような知的活動のイニシアチブは、徐々に、「ジャワ学」の下へ移行していった。この過程はまたオランダ本国で「ジャワ学」の講座が設置され研究機関と学術研究誌が作られて、ジャワ学者の調達と学の伝統が形成されていく過程であった。このような圧倒的な制度化が進行する過程で、ジャワの秘義の

世界・その知の伝統はあたかもガラス箱の中に収められるようにして、オランダ（その中核としてライデン大学）へ移行していくのである。

(3) このことは、ジャワの王宮が秘義の主宰者であるどころか、西欧近代知性の隈なく明るい光に照射され解義されるということの意味している。「王宮が博物館と化す」という状況、「プジャンガのジャワ古典についての知識の当否がジャワ学者によって判断される」という「無慙」な状況が出現したのである。19世紀末をもってジャワのプジャンガの伝統が途絶えたということは、上のような状況と直接にかかわっていたのである。この状況がさらに進展するとジャワ人の中から「ジャワ学」の伝統に直接参入する者が出現する。彼らはオランダ人学者を師としてライデン大学に学び、その成果をオランダ語で発表して学位を得る、という道程を歩む者たちである。現在なお続くこの状況は今世紀になって開始されるのであるが、ここにこそ、19世紀以降制度化されていく「ジャワ学」の強靱性が示されているのである。

#### 4 「失われた王国」の遺産目録

ナショナリズムとジャワの王権の関係は、以上に概観してきたことがらの帰結として、次のようにまとめることができる。

第一は、18世紀以降のジャワの王権がたどった道程の中に明示されているように、王権そのものが複数となって並存・競合してきたことの帰結として、ジャワそれ自身が一つの観念によって収斂していくべき現実のセンターを完全に喪失していたということである。

現実の王権のその何れもが政治的に無力化しオランダによって「封印」されるという状況は19世紀半ば迄に完成していた。ディボネゴロ戦争の終結（1830年）が、ジャワの王権の物理的潜在力の最後の表明であり、それ以降ナショナリズムが誕生する迄の約80年間、ジャワは名実ともに「静謐」の時代を迎えていたのである。ジャワであれこれの「救世主運動」が散発的に発生するのは、ディボネゴロ戦争以降のことであるが、これらが何れも現実の王権と断絶したところで発生する「千年王国運動」であったこと、すなわち、「失われた王国」

の再生をめざすものであったこと〔土屋 1971 : 247-249〕は、ジャワの王権の潜在力の喪失という状況を見事に示していたのである。

第二は、ジャワの王権が政治的に無力化するのと軌を一にして文化的活動に特化したことの結果として、ジャワ語の言語空間が異様に濃密化したことである。それは、ジャワ語が跪拜の構造を制度化していくことを意味したが、それとともに、植民地権力がこの構造を支えること——典型的に「ホルマット制」〔Sutherland 1979〕の進展とジャワ語教育の拡大——を意味していた。「世界でもっとも温和なジャワ人」というクリシェの成立する根底にあったのは、このようなジャワ語の機能であったといえるだろう。ジャワでナショナリズムが誕生するのとジャワで二重言語状況（オランダ語とジャワ語もしくはマレー語とジャワ語）が成立するのが軌を一にしているのは、まさにこのようなジャワ語の言語空間のつりゆく重さということがらと深くかかわっていた。ジャワ語以外の何らかの言語によってジャワ語が対象化される時——すなわち、ジャワ語の世界に住む人々のあいだで新しい概念と心理とが共有される時——ジャワ語の重さとは、現実の王宮をセンターとしてそこに収斂する言語空間の重さと、現実の植民地支配の重さとの二重の重さとして意識されていた。<sup>9)</sup> ジャワ人のナショナリストにとって、ジャワ語に代えてマレー語（インドネシア語）を用いるということは、たんに彼らの聴衆（現実の聴衆と想像された聴衆とを問わず）がジャワ語圏の外にまで広がっていたということだけでなく、ジャワ語の世界からの解放・ジャワ語の言語空間をみたく秩序からの解放が、植民地的秩序に拮抗する新しい秩序・対抗秩序を創出するために必須のことがらであったからである。

第三は、「ジャワ学」の成果が、ナショナリストにとって「失われた王国」の遺産目録・財産目録として機能した、ということである。「ジャワ学」とナショナリストの関係を考える上で重要なことは、「ジャワ学」がジャワの書き言葉の世界・王宮の大伝統を研究対象として成立していたこと、および、その成果がオランダ語によって公開され蓄積されていったことである。すなわち、ジャワ文化の伝統の正統なかたちが、ジャワ語以外の言語によって徹底的に対

象化されたのである。このことは既に述べた通り、オランダ語という窓口を通れば、何人でもその成果に接近しうること、宮中の秘義の世界を目のあたりにしうることを意味していた。ところでジャワ人の中で、オランダ語とジャワ語の二重言語の世界に生きるようになる最初の世代は、19世紀末から今世紀初めにかけて登場してくる。彼らは、オランダ語の文書を理解し作成しうる人々であり、その中核に存在したのは、植民地官僚制の中に調達されていったエリート、すなわち、何れの王家であれマタラム王国の系譜につながる王侯貴族・家臣団（プライイ層）の家系の出身者であった。この集団こそジャワのナショナリストを生み出す供給源であった〔Nagazumi 1972〕。

彼らにとって、オランダ語で解義され整序されたジャワ文化、殊に古典古代の文化は、現実の政治的に無力な王権とは全く別の「失われた王国」の理想型を再編成するための格好の「目録」であった。アカデミズムの成果は「世俗化」されて、ナショナリストの意のままに取捨選択され組み替えられることになる。こうして、「栄光の過去」と「黄金の時代」が自在に復原され、ナショナリストの描き出す文脈——なかんずく、植民地的秩序に拮抗する新しい秩序を構築するという文脈——の中に定置されることになる。「ジャワ学」がナショナリストにとって「遺産目録」・「財産目録」となるとは、このような状況を意味したのである（そして、このような編成替えにもっとも成功したナショナリストこそ、タマン・シスワ運動を創出した人々であった〔土屋 1982a〕）。

## II ジャワの文化変容

以上に概観した王権の変容は、ジャワ（ことにジャワ語の言語空間）が、「ジャワ学」によってであれナショナリストによってであれ、ジャワ以外のものによって対象化される、ということがらと密接にかかわっていた。この過程をひきおこす直接の契機となったのは、「ジャワ学」の展開や二重言語状況の出現であったが、それらをもたらず背景にあったのは、いうまでもなく、19世紀半ばから進行して20世紀初めには完成する植民地国家——バタヴィアを政治・経

済・行政のセンターとし植民地の行政区画に沿ってサブ・センター以下の官僚ヒエラルキーが形成され、これらの植民地都市（もしくは都市内部の植民地空間）を結ぶネットワークが十全に機能することによって維持される領域支配の体制——であり、この国家を支えるべく創出された近代的西欧的教育制度（この制度に沿って人々はバタヴィアに収斂するヒエラルキーを経験する、すなわち「新しい巡礼圏」[Anderson 1983: 104-128] がそこに成立する）や交通網・情報網の拡大と緊密化であった。<sup>10)</sup> この中から、人々がジャワ語圏の世界の外（典型的にバタヴィア）へ出て新しい世界を目にし新しい情報を得る——なかんずくオランダ語を通じて世界大の情報を得る——という状況・情報が開放系になるという状況が始まるのであり、それがやがてナショナリズムを生み出す直接の契機となるのである。

しかしこの過程はたんにナショナリズムを生み出しただけではない。そこで進行していたのはジャワ島におけるゆるやかな社会変化であり、その変化にもなって生れてきた新しい文化状況であった。そこで重要なことは、これらの変化が20世紀以降に始まるナショナリズムに先行して生じていたこと、なおかつ、ナショナリズムが「インドネシア」という「時代精神」を鼓吹し領導していくに際して、「インドネシア」文化を生み出す統合力を草の根のレベルで作りあげていったことである。

ここにいう新しい文化状況とは、19世紀後半から出現する大衆文学や民衆音楽であり、それらは、植民地国家の文化政策やナショナリストが追究する文化活動（各種政党の出版活動、宗教改革、教育運動、集会と討論、これらを通じての政治的動員のレベルを高めること）とは、直接的には無縁のままに、ジャワ島をはじめとする植民地社会各地で原住民社会それ自身を消費市場として自生的に展開していった大衆文化であった。そのゆえにこそ、ナショナリズムが前進と後退、高揚と退潮を繰り返すなかで、これらの文化現象はそれ自身一つの社会過程として自己増殖的に進行し、「インドネシア」民族文化の形成——「ジャワ」から「インドネシア」への変容——に対して一貫して潜在的な統合力として作用しつづけた。

以下にこの新しい状況を概観してみよう。

### 1 「メスティーオ的文化圏」の成立

19世紀の半ば以降、ジャワではジャワ族の生活空間であると否とにかかわりなく、バタヴィア、バンドゥン、スマラン、スラバヤなどの植民地都市を中心にして、次のような社会変化が共通に認められるようになる。第一はジャワのオランダ人社会が「純正」化することである。<sup>11)</sup>「純正」化とは、オランダ本国の市民社会がそのままジャワに再現されるという社会現象であり、その前提をなしたのは19世紀前半以降植民地国家の制度化の進行が18世紀末迄のVOCの時代に脆弱化していた植民地と本国の紐帯を強化させる政策と軌を一にして進行していったことである [C. Day 1904]。植民地経営にかかわる本国政府の管轄権が拡大するのにもなって、VOC時代に形成されていたクレオール社会のネットワーク（これはVOCにかかわる門閥・閥閥支配の存在を基礎として成立していた）はその機能を停止して、本国から植民地行政官として派遣される官吏のネットワークにとって代わられた。こうして、VOC時代の「現地化」した生活様式（その典型として現地妻〈ニャイ〉の存在と子弟の養育を預かる乳母〈バブ〉の存在）に代わって西欧市民社会の生活様式が植民地に根付くようになった。この傾向は、1870年のスエズ運河開通以降、家族を同行する官吏や企業家が漸増するのに従って加速された。こうして、新しい住宅街（並木と広い前庭と広い応接室）と教会、子弟のための学校、各種のクラブ、乗馬やテニス、郊外の保養地のような生活空間が植民地都市に出現し始めた。<sup>12)</sup>

第二はオランダ市民社会が形成されるのにもなって、<sup>ユーレシアン</sup>混血集団 (Eurasian) がその分だけ「現地化」したことである。彼らの数は19世紀中を通じて増え続ける一方で、<sup>13)</sup> 19世紀中の行政改革によって植民地官吏への途を閉ざされたことから、次第に植民地都市の外へと生活空間を拡大していった。その顕著な例は、民間プランターとしてプランテーションの経営に当るものであり、それは彼らがジャワの農村地域に拡散するとともに、そこでVOC時代以来の「現地化」した生活様式を維持し続けることを意味した。要約すれば、ユーレシアン



は19世紀中を通じてジャワの全域に遍在するようになるのである。第三は、プラナカン（ジャワ生れの華人）の数が増大するとともに、その「現地化」の過程が19世紀の半ばまでには著しく進行していたことである。プラナカンの「現地化」の標識は、マレー語だけを解する華人が増大したこと、および、大小の流通機構の毛細管に至るまで彼らが浸透していったことである。これは華人の同化現象であるとともに、華人が先のユーレシアンと同じくジャワに遍在するようになったことを示している。第四は、いうまでもなく、ジャワの上層階層、とくにプリアイの生活様式が、オランダ社会が「純正」化するのにもなって次第に西欧化していったことである。この過程は、原住民エリート層の間にオランダ語とジャワ語という二重言語状況が進展する過程と軌を一にしていたといつてよい。

このような社会変化の一つの重要な帰結は、植民地国家の中核であるジャワ島（とくに都市部）が、新しい生活空間を創出し拡大していく点でフロンティアとして機能するようになったことである。それはたんに、中東部ジャワのジャワ語圏の生活空間から離れて植民地都市に移り住み（もしくは各地で植民地官僚制にくみこまれて）新しい生活を経験するようになったジャワ人にとってのみフロンティアとなったのではない。ジャワ島にめぐらされていく官僚制度とジャワ島の各地で拡大していく植民地都市とは、ジャワ人のみならずオランダ領東インドのすべての領域の人々（とりわけエリート層）にとってフロンティアであった。同じく、オランダ人、ユーレシアン、華人のいずれにとってもジャワ島はフロンティアとなったのである。このような状況は20世紀以降さらに進行するのであるが、このフロンティアでは、ファーニバルのいう「複合社会」[Furnivall 1939: 446-469]が固定的に成立していたのでは決してない。むしろ逆に、そこでは、これらのすべての社会集団（少なくとも複数の社会集団）が共有する文化現象が現われ始めていたことが注目される。19世紀の半ば頃からジャワの植民地都市で出現するこのような文化現象は「メスティーソ的文化現象」と名付けることができよう。ここに「メスティーソ的文化現象」とは、文化の市場圏（生産者と消費者）においても文化の形式と内容においても、それがあ

特定の社会集団・文化集団に完全に帰属することがないゆえに、複数の集団によって共有・分有される文化状況である。ジャワの場合、この文化現象に共通するのは、(いずれの集団からみてもその集団の外の世界への) エキゾチシズム (およびその系としてのロマンチシズムと「怪奇趣味」)、メランコリー、センチメンタリズム等の心理であり、その心理の中核にあるのはノスタルジアである。一方、その形式を約言すれば、それはクリシェの成立する世界である。

併せて注目しうるのは、これらの文化現象が市場原理にもとづいて生み出され発展していったこと、そして、その発展の結果、やがて原住民社会そのものを最大の消費市場とすることになったということである。この過程で、「メスティーソ的文化現象」はその「メスティーソ性」から離脱して「多様なインドネシア社会」の全域で消費可能な、従って「多様なインドネシア社会」の統合力として働らく「民族文化」としての性格を顕著に示すようになる。それが統合力たりえたのは、それが「マスカルチャー」として展開していったということと相並んで、これらの文化現象がその起源において、「メスティーソ的」であったということと密接にかかわっていたのである。

これらの「メスティーソ的文化現象」の成立と展開の具体相はどのようなものであったのか。それについて各論を展開することは本稿の範囲を越えることなので、さし当りその見取り図だけを以下に描いておこう。

## 2 新しい文化現象

ジャワにおける「メスティーソ的文化現象」として注目しうるのは、次の四つの文化領域である。第一は、(1)新しい様式の風景画の成立であり、第二は、(2)クロンチョン (Kroncong) 音楽の拡大であり、第三は、(3)マレー語大衆小説の成立であり、第四は、これら(1)から(3)の領域を統合するものとしての大衆演劇の成立と展開である。

(1) この領域は「美しき東インド」の風景画と総称される。そこで描かれるのは、青空をながれる雲、火山、椰子の樹、水田と水牛、笛を吹く少年、赤いショール、波立つ海岸線など、雨に洗われ日にかがやく「うるわしの熱帯」と

美化された田園風景である。その色調は淡い褐色と黄色とを基調としている。このような甘美な風景画が「静寂と平和と歓喜にみちたパラダイス」[C. Holt 1967 : 195] を表現していることはいうまでもない。そこでは、熱帯の植民地は「うるわしの東インド」として再構成されているのであるが、重要なことはこのようにして風景が対象化されてある輪郭を与えられていること、風景がクリシェの風景として再構成されているということである。

このような風景画は植民地社会のオランダ人の邸宅の応接室の壁を飾るところから開始されたという。植民地国家の制度化とオランダ人社会の「純正」化の結果、ジャワでの滞在が「任期をまっとうする」ことであるというオランダ人家庭が増加した [Smail 1971 : 281-283] が、彼らは任期中に応接室を飾った風景画を帰国に際して故国オランダへ持ち帰った。それらの風景画は「彼らのノスタルジア、彼らのものであってなおかつ彼らのものにあらざる土地へのノスタルジア」[C. Holt 1967 : 195] をかきたてるものであったからである。当初それらを制作したのはオランダ人の風景画家であったが、今世紀に入ると A. Surio Subroto (1878~1941), Mas Pringadie (c.1875~c.1936), Basuki Abdullah (1915~ ) のように同じ手法で風景画を描くジャワ人の職業画家が現れてくる。それとともに、「美しき東インド」の風景画はオランダ人社会を越えて植民地の各社会集団の間に受容されるようになる。さらに重要なことは、このクリシェの風景が「大衆市場」に浸透して（今日あまねく眼にするような）みやげ細工のデザインやバティックの壁掛けの中にくり返し現れるようになることである。

これらのことは、各々の社会集団・文化集団にとってそれぞれに「彼らのものであってなおかつ彼らのものにあらざる世界」の風景がその「メスティーソ性」を離脱してただ一つの社会集団のもとへと帰属していくことを示している。すなわち「うるわしの熱帯」は「うるわしの祖国」へと変容していくのである。こうして風景が対象化されそれがクリシェとして再構成され、次いで、その風景に「国籍」が与えられていく過程を、われわれは植民地の風景画の成立と展開のうちに認めることができるのである。そして、ここにいう「ただ一つの社

会集団」ないし「祖国」ないし「国籍」とは、〈インドネシア〉という以外に命名しようのないものであった。<sup>14)</sup>

(2) 上に述べた風景画とその起源と展開の様相を異にしなが、きわめて類似した文脈において定置しうるのがクロンチョン音楽である。<sup>15)</sup> 今日のインドネシアで代表的な(唯一の)国民音楽としてあまねくゆきわたっているクロンチョン音楽がジャワの各地にひろがるのも19世紀の後半以降のことであった。クロンチョンの起源は「ポルトガル系」住民(実際は、もともと南アジアとインドネシア各地から奴隷として調達され、のちにキリスト教に改宗した「解放奴隷」Mardijkersを主体としていた)の伝統音楽である。1661年以降「ポルトガル系」住民はバタヴィア北東部のトゥグ地域に集住させられていたが、彼らは本来「子守唄」および「舟曳き唄」として歌われていたポルトガル音楽にアジア諸地域の音楽が混在してできたクロンチョン音楽(これはポルトガルでは「ムーア人の音楽」という意味で「モリッコ音楽」とも呼ばれた)を遠い先祖と自分たちをつなげるよすがとしてひき語り伝えてきた。クロンチョン・ギターが細かくリズムを刻む上にもうくセンチメンタルな旋律が流れるのがこの音楽の特徴で、ハワイアンのような海洋音楽と共通性をもつ。

19世紀の後半に入るとトゥグ地域と周辺の外界との接触が次第に緊密化し、クロンチョンは「ポルトガル系」住民の文化伝統の枠を越えて他の社会集団に浸透するようになった。この過程でもともとポルトガル語で歌われていたクロンチョンに加えて、マレーの四行詩(パントゥン)やオランダ語で歌われるクロンチョンが作られ、同時に、歌詞と旋律の双方においてノスタルジックな情感を誘う基調が定着していった。クロンチョンはその後恋歌として歌われることによって兵営から兵営へ港から港へと、ジャワのみならずインドネシアの各地に拡大していった。なかでもトゥグからわずか2kmの海岸に、1870年代にはタンジュンプリオクの大港湾が完成し、インドネシアの各地を結ぶ航路の一大センターとなったことがクロンチョンが各地に浸透していく上で大きな要因となった。

当初クロンチョンはマレー語で歌われたりオランダ語で歌われたり、時には

マレー語とオランダ語の歌詞がかけ合いの形でくり返されたりした（これが恋歌としてのクロンチョンの特徴をもっとも良く示している）が、この音楽をもっとも好んだのはほかならぬユーレシアン（ヨーロッパ系）の社会集団であり、彼らはクロンチョンこそ彼ら自身の音楽であると感じていたという。

以上にうかがえるようにクロンチョンもまた先の絵画の様式と同様に、その旋律がどこにも所属しないことによって多数の社会集団の間に広まっていったといえよう。この無所属性（ユーレシアンにもっとも愛好されたことがそのことを明示している）と、それにもかかわらずその歌詞と旋律がロマンチズムやノスタルジアをかきたてたことは、19世紀ジャワの新たな文化状況、アモルフで「メスティーク的」な文化状況をみごとに示している。そこでは、クロンチョンの旋律によっておのおのの人間が、たとえうたかたにせよ、いづこかに存在するやすらぎの地への「あこがれ」をかきたてる、という心象風景が成立していたといえよう。事実クロンチョンは「古きよき時代」を回想するよすがとして、（インドネシアでもオランダでも日本でも）今日なお演奏されているのである（その格好の例は各地の「インドネシア・レストラン」のバック・ミュージックである）。

しかるに時代が下るほどにクロンチョン音楽は民族性を強めていく。ジャワ史上、広く公然と歌われる最初の恋歌であったことによって巨大な潜在的市場を獲得した<sup>16)</sup>（20世紀のインドネシア民族文学の主要なテーマが「封建的」結婚制度からの解放と「男女の真の愛」の覚醒であったこと<sup>17)</sup>に注意してほしい）クロンチョンは、今世紀以降、Ismail Marzuki (1914～1958)<sup>18)</sup> や Gesang Martohartono (1917～ )<sup>19)</sup> に代表されるすぐれた作曲家と数々の名曲を生み出す一方、年ごとのコンクールを通じて有名歌手や楽団 (orkes kroncong) を背出し、一方、ジャワ風にアレンジされたクロンチョン（ジャワ語で歌われガメランのリズムがビートに加えられる）、ジャワ・クロンチョン (Kroncong Jawa) が現われることによってジョクジャカルタやスラカルタのようなジャワ語圏の中心部にまで深く浸透していった。1925年のラジオ放送の開始はそれをさらに加速した [Kementerian Penerangan 1953; Armijn Pané 1953]。この過程は民衆音楽の発展というそれ自身自立した社会過程として進行したのであり、ナショナリズム

の高揚や退潮とは直接に関連することはなかった。それがナショナリズムに結びつくのは独立と革命の時代であり、1945年以降には数多くのクロンション革命歌 (Kroncong Revolusi) や愛国歌 (Kroncong Patriot) がうみ出された。そのことは20世紀の半ばまでにクロンションが、インドネシアの全域で流通可能な殆んど唯一の音楽形式に発展していたということを示している。このような過程は先の風景画よりもさらに端的に、ある文化現象がその「メスティーソ性」・無所属性を脱して「国籍」を得るに至る過程を明示している。<sup>20)</sup>

(3) 19世紀の後半から始まるもう一つの顕著な社会現象は、マレー語の日常会話体で書かれた大衆向きの小説が出版市場に登場したことである。<sup>21)</sup> それまでジャワの出版市場はオランダから輸入される出版物を除けばオランダ語の各種新聞に限られていた。マレー語大衆小説という市場を開拓してその出版元になったのはプラナカン集団であったが、それは彼らがジャワの全域に遍在していることにとまって出版・販売の市場はジャワ全土に広がっていた。その主たる読者層はもはや中国語を理解しないプラナカンであり、読物の多くは中国起源の歴史物、活劇物、詩などの翻訳ないし翻案であったが、それらがマレー語の書物として刊行されていったことは、この市場に他の文化集団の参入をうながすことになった。すなわち、オランダ人、ユーレシアン、プラナカン、ジャワ人をはじめとする植民地の知識人らによって、単なる翻訳・翻案でなく、ジャワを舞台とした物語がマレー語で創作されて広い読者層を獲得するようになる。これらの物語の内もっとも広く読まれたのは、『ニヤイ・ダンマ物語』(1895年)、『ニ・パイナ物語』(1900年)、『ロッシーナ物語』(1903年)のようなニヤイを主人公にした被虐性の強い犯罪小説(これらは何れも「実話小説」のスタイルで書かれた。また、毒殺と刺殺への恐怖が全編をつらぬいていた)か『奴隷から王様へ』(1898年)のようなジャワを舞台にした歴史小説であった。<sup>22)</sup> このような大衆小説は20世紀に入っても活況を呈し、『紅はこべ』の翻案小説とシャーロックホームズの翻案物などが人気を博し、主人公は民衆のヒーローとなった。一方、『ニヤイ・ダンマ物語』のように再三演劇化されたり映画化される(1929年が最初の映画化)とともにそのつど物語が民族化する(たとえば今世紀に入るとニヤ

イ・ダンマは『人形の家』のノラのように描きなおされる) 傾向をみせた。<sup>23)</sup>

これらの大衆小説の伝統は「正統な」民族文学史の中では「マレー・シナ文学」ないし「前インドネシア文芸」としておとしめられ遠ざけられてきた。しかし、「バライ・プスタカ」(1917年の官製「文化文芸局」)の時代に始まって「プジャンガ・バル」(1933年以降に刊行される文芸誌)で開花する正統インドネシア文学のはるか以前に市場に現われた大衆小説こそ、20世紀を通じて、実はもっとも広く民衆に読まれかつ語り伝えられてきた文芸であった。とくに小冊子で安価なことがこの文芸市場の継続性と市場圏の拡大を支えていた。

19世紀の「メスティーソ的文化現象」として出現したこれらの大衆小説の世界は、20世紀になって一方でそれ自身の展開過程を辿りつつ、他方ではナショナリズムの「時代精神」を吸収し、この「時代精神」と手を結ぶようになる。先に述べた『ニャイ・ダンマ物語』の変化や『紅はこべ』の一連の翻案物の主人公が反植民地闘争の伝説的闘士であるタン・マラカになぞらえられる<sup>24)</sup>のは、その顕著な例である。ここにも「メスティーソ的」世界からの離脱とその民族化という共通の過程が認められるのである。そしてさらに時代が下って1970年代の末になると、これらの「ニャイ」物語は、プラムディアというインドネシア国民文学のもっとも正統な担い手の文学世界の中に、それらが初めて出版市場に現れた時からほぼ1世紀を経たのちに、生き生きとよみがえることになるのである。<sup>25)</sup>

(4) 大衆演劇として19世紀末に成立し、それ以降、以上の各分野の文化現象を統合的に表現することによってそれらの拡大に寄与したのが、コメディ・スタンプル (Komedi Stambul) というユニークな劇団であった。この劇団は1891年にスラバヤで結成されたが、その中心人物は August Mahieu というユーレシアンと Yap Goan Tay というスラバヤ生れのプラナカンであった [Salmon 1981 : 40]。

この劇団名スタンプルがイスタンブールに由来するといわれているように、そこで舞台化されたのはエキゾチズムにみちた「国籍不明」の世界であった。Mahieu らはサンディワラ (インドネシア各地の民衆劇) とフランスの喜劇を融合

し、アラブ、トルコ、ベルシャなどに由来するおよそエキゾチックな舞台装置、衣裳、テーマを合体させた演劇様式を作り出した。演じ物も「白雪姫」や「眠り姫」のような西欧の妖精物語から始まってシェークスピアの悲劇、中国の活劇、ジャワの物語、『ニャイ・ダンマ』のような大衆小説などを自由自在にアレンジしていた [Armijn Pané 1953: 8-10]。このような様式こそ、複数の文化集団からなる観衆に受容される条件であり、この劇団は、ジャワの各地、ことに沿岸沿いにひろがるバタヴィア、スマラン、スラバヤのような植民地都市を興行して歩き大きな人気を博したという。

舞台で用いられた言語はマレー語であったが、そこにはしばしばオランダ語が混入した。ところで、このような「国籍不明」の極彩色の舞台上で、舞台の情感を高めたり場面の展開を促したりするためのバック・ミュージックとして用いられたのが、ほかならぬクロンションの旋律であり、ギター、ヴァイオリン、フルート、打楽器、ピアノなどを伴奏にしてクロンションの歌が歌われた。このようにしてコメディ・スタンプルの舞台から生れ流布していったクロンションは、とくにクロンション・スタンプルと称されている。F. Cramer のような有名な舞台俳優は、しばしば人気のあるクロンション歌手であった [Salmon 1981: 129]。

このようにユーレシアンとプラナカンを担い手として始まったコメディ・スタンプルはクロンション音楽をジャワ各地に広める役割を果たすとともに、その興行的成功は同種の劇団 (Komedi Opera Stambul, Opera Permata Stambul, Wilhelmina, Sinar Bintang Hindia, Indra Bangsawan, Opera Bangsawan など。その興行主の多くはプラナカンであった [C. Salmon 1981: 40]) がひき続いてジャワ各地で設立される契機となった。さらにまた、このような民衆向けの劇団興行の活況の中から、1911年にスラバヤで設立されて東ジャワに広まったルドルク・ブスタン (Ludruk Bestan) [Ki S. Ajiwongsokusumo 1972] や、1926年にスラカルタで生れその後ジョクジャカルタを中心にして発展したケトブラック (Ketoprak) [Asti Dipodiningrat 1972] や、独立後ケトブラックの系譜をひいて成立し現在もっとも人気のあるスリムラット (Srimulat、この名称は設立者の名前



に由来、彼女は1905年生れで1968年没) [Kristanto 1983] のような、ジャワ人を主体とする民衆演劇の世界が生れ育っていくのである。

### おわりに

本稿の冒頭で述べた通り、国民国家インドネシアが「蘭領東インド」というオランダ植民地国家の編成とインドネシア・ナショナリズムの成立展開を両親として誕生したことはいうまでもない。しかし、これらの顕在的な政治統合の過程に先立って、もしくはその背後で進行していたジャワ王権の変容とそれともなって生じた王宮文化の変容、また、植民地都市空間の社会変化とそれともなって生じた文化変容の過程は、本稿で概観してきたように、「ジャワ」から「インドネシア」への変化、もしくは、「ジャワ」において「インドネシア」が成立する過程にとって、それぞれに重要な役割を果たしてきた。そこで認められるのは、ジャワ語圏の世界が文化的閉塞状況の極点にまで達していたがゆえに、何らかの新しい「世界」が外からもたらされさえすればその「世界」に激しく反応する状態にあったこと、そして、その新しい「世界」とはナショナリズムが「上から」鼓吹し領導する「時代精神」であったばかりでなく、それに先行してひそやかに進行するアモルフな文化現象であった、ということである。こうしてみると、19世紀は「ヤミ」の彼方にあるのでは決してなく、やがて「インドネシア」の統合力として機能する文化現象が成立した時代であり、従って、19世紀と20世紀は「ヤミ」と「ヒカリ」の二項対立・二つの時代の断絶としてでなく、一つの連続した社会過程においてとらえることができるであろう。

本稿の趣旨はこの過程の見取図を描くことであり、それぞれの過程を追究すること、また、ジャワ以外について「インドネシア」が成立する過程を同様の視角から究めることは、今後の課題である。

## 注

- 1) 本稿は「インドネシアの政治と文化」に関心をもつ筆者がこの数年の間に発表したいくつかの論考を再考・再検討しながら再構成したものである。とくに本稿と関連するのは[土屋 1982a; 1982b; 1983a; 1983b; 1984a; 1984b]である。またこれらの論考の多くは、1981年以来東南アジア研究センターの社会系が主催してきている「東南アジアシンポジウム」で発表したものがその基礎をなしている。これらのシンポジウムは他にかえがたい知的模索の場を筆者に与えてくれた。
- あわせてまた近年世界の各地で公刊された作品のいくつかが本稿のなるに当って筆者に知的刺激を与えた。その主なものは、[Anderson 1979; 1982; 1983], [Briton de Nijs 1973], [Kornhauser 1978], [Pramoedy A. T. 1980a; 1980b; 1982], [Salmon 1981], [Taylor 1983]である。
- 2) この用語は O. W. Wolters による [Wolters 1982:38-40] が、彼はこの概念の基礎を17世紀初めのマカッサルの王の次の言葉に求めている。  
 God has made the earth and the seas, has divided the earth among mankind, and given the sea in common. It is a thing unheard of that anyone should be forbidden to sail the seas.
- 3) ジャワの王権の自己完結的な体系についてはこれまで数多くの議論がなされているが、さし当り [Schrieke 1957], [Geertz 1968], [Murtono 1968], [Anderson 1972], [土屋 1982a] 等を参照。
- 4) ギヤンティ条約とその成立前後の政治状況については [Soekanto 1952], [Ricklefs 1974] に詳しい。
- 5) 19世紀ジャワ文化の中から、この『バンゴン・トボの書』とスラカルタ王家の「最後の宮廷詩人」であったロンゴワルシトの作品をとりあげて、文芸の伝統の解体という観点からすぐれた解説をしたものとして Anthony Day の学位論文がある [Anthony Day 1981]。  
 本稿中の adoh, および oneng の語は、dolan「外へ出たい」という語とともに Anthony Day が彼の学位論文のなかで『バンゴン・トボの書』の世界を作り上げているキーワードとして示した語である。
- 6) この競合の状況を示すのは「争そう」と「比べる」という二重の意味をもつ *tanding* というジャワ語である [A. Day 1981: 87]。
- 7) Seloemoardjan は、王宮が言語表現の様式性とこれにともなう所作の厳密性において、そこへ足をふみ入れたジャワ人に恐怖感をもたらすことを指摘し [Seloemoardjan 1962: 25], J. Siegel はジャワ人自身がしばしば「ジャワ語(すなわちクロモのジャワ語)がいかにもむづかしいか」ということをなげくの耳にしている [Siegel 1982]。
- 8) ジャワ語についてのこのような議論として [Pigeaud 1967], [Soepomo 1968; 1969], [Anderson 1982] を参照。
- 9) このような状況をきわめてよく伝えるものとして Kartini の書簡集 [Kartini 1911] と Pramoedy の歴史小説 [Pramoedy 1980a 1980b] がある。
- 10) 交通網の拡大とこれにともなう人の移動を示す一つの標識として「オランダ領東インド国営鉄道延長キロ数」と「ジャワ島の旅客延べ数」の概数を示す。以下は Reitsma [1925: 80, 178] をもとに作成したものである。

オランダ領東インド国営鉄道延長キロ数

年次	km	年次	km	年次	km
1878	20	1894	1150	1910	2100
1882	300	1898	1700	1914	2550
1886	650	1902	1900	1918	3600
1890	900	1906	2100	1922	3950

ジャワ島の旅客延べ数			
年次	延べ数(万人)	年次	延べ数(万人)
1878	3	1902	1400
1882	150	1906	1800
1886	350	1910	2700
1890	600	1914	4000
1894	550	1918	5150
1898	750	1922	6300

なお郵便・電信網の成立と展開については、[Departemen Perhubungan1980] に詳しい。

- 11) 以下の VOC 社会についての記述は主として Taylor [Taylor 1983] による。
- 12) 1870 年以降 1910 年代初め（すなわちスエズ運河の開通から第一次世界大戦の勃発まで）の時代を「テンポ・ドゥル Tempo Doeloe」（「古きよき時代」）という語で表現して、その時代相を写真集として編んだ Briton de Nijs [Briton de Nijs 1973] の書はこの時代の社会と風俗をいきいきと伝えている。それは一言でいえば植民地国家の形成によってもたらされた「秩序と安寧」の時代であった。「テンポ・ドゥル」とは植民地時代へのノスタルジアを含む語として近年インドネシアでもしばしば用いられるようになっている。典型的な例は、後に述べるクロンチョン音楽のカセット集の表題として用いられる例である。
- 13) Van der Veur の推計によれば [Van der Veur 1955 : 26], ジャワ在住のユーレシアンは 1815 年当時で 1750 人, 1854 年当時で 1 万 4000 人, 1860 年当時で 4 万 4000 人, 1905 年当時で 9 万 5000 人であり, 1930 年当時には 24 万人に達していたという。
- 14) このようなクリシェとして表現された風景が文章表現のうちに定着し, そこに「ジャワの風景」(「うるわしのジャワ」)と「(インドネシアの) 風景」(「うるわしの祖国」)という心象が同時に成立している見事な例は, カルティニの『書簡集』に認められる。これについては土屋 [土屋 1984b] を参照。
- 15) クロンチョン音楽についてはさし当り, Manusama [1919], B. Buys [1921], Kongko [1955], Da França [1970], B. Nieuwenhuys [1973], Kornhauser [1978], Gereja Tugu [1984] などを参照。
- 16) クロンチョンは, 当初「若い娘をかどわかすもの」で風俗をみだすものであるという警戒心 [Armijn Pane 1953 : 23] を一般の社会に生み出したようである。たとえば, Kongko [1955] は夜になると村から村へクロンチョンの愛の歌をひき語りながら巡回する一団についての思い出を記している。それが町や村の少女の心を強くひきつけたのである。
- 17) 例えば白石 [1984] を参照。
- 18) 彼の名は, ジャカルタ芸術センター (Taman Ismail Marzuki) の名称として用いられている。今日なお愛唱される多くのクロンチョンが彼の作曲による。Rayuan Pulau Kelapa (1944), Halo Halo Bandung (1945), Gugur Bunga (1949), Indonesia Pusaka (1947), Oh Angin Sampaikan Salamku (1947) など。
- 19) わが国でも愛唱されている Bengawan Solo (1940) をはじめ, Saputangan (1942), Jembatan Merah (1943) など作曲した。
- 20) 国歌「インドネシア・ラヤ」(1928 年に Wage Rudolf Supratman によって作詞・作曲) を代表とするナショナリズムの過程で生れた民族歌, 行進曲等がインドネシア全域で受容されていく過程もしくは政府がそれを普及していく過程と, クロンチョンが広がる過程は別の社会過程であるが, 前者の過程に先行してクロンチョンが各地に浸透していたことは, 前者の普及・受容にとって一つの重要な与件であったと思われる。
- 21) 以下の記述は主として Salmon [1981] による。
- 22) これらの作品はすぐれた解説とともに Pramoedya によって「テンポ・ドゥル」の作品集として編まれている [Pramoedya 1982]。
- 23) オリジナル版と 1930 年代の映画化された『ダンマ物語』と 1960 年代の三つの版を比べると,

- このことは明瞭である。それぞれ、[G. Francis 1895], [Palindih 1930?], [Ardan 1965].
- 24) 押川典昭氏の御教示による。
- 25) H. Kommer の *Tjerita Nji Paina* は Pramoedya [1980b] の中のエピソードとしてほとんどそのままの形で用いられている [Pramoedya 1980b: 125-152]。また、Pramoedya の全編を通して重要な登場人物の一人である Nyai Ontosoroh と H. Kommer の *Tjerita Kong Hong Nio*, 1900 の女主人公との間にはあきらかな共通性 (性格と状況設定) がうかがえる。

#### 参考文献

- Adjiwongsokoesoemo, S. 1972 (1979). Nglacak Sejarah Perkembangan Seni Ludruk. In *Javanese Literature Since Independence*, edited by J. J. Ras. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Anderson, Benedict. 1972. The Idea of Power in Javanese Culture. In *Culture and Politics in Indonesia*, edited by Claire Holt. Ithaca: Cornell U. P.
- . 1979. A Time of Darkness and a Time of Light: Transposition in Early Indonesian Nationalist Thought. In *Perceptions of the Past in Southeast Asia*, edited by Anthony Reid and David Marr. Singapore-Kuala Lumpur-Hong Kong: Heineman Educational Books.
- . 1982. Politik Bahasa dan Kebudayaan Jawa. *Prisma*. Vol. 11, No. 11. Jakarta.
- . 1983. *Imagined Communities, Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso.
- Ardan, S. M. 1965. *Njai Dasima*. Jakarta: Pustaka Jaya.
- Armijn Pane. 1953. *Produksi Film, Tjerita di Indonesia, Perkembangannya sebagai Alat Masyarakat*. Jakarta: Badan Musyawarah Kebudayaan Nasional.
- Breton de Nijs, E. 1973. *Tempo Doeloe, Fotografische Documenten uit het Oude Indie, 1870-1914*. Amsterdam: Em. Querido's Uitgeverij B. V.
- Buys, Brandts J. S. 1921. De Ontwikkelingsmogelijkheden van de muziek op Java. *Jawa*. Vol. 1.
- Day, Anthony. 1981. Meanings of Change in the Poetry of Nineteenth-Century Java. Ph. D. Dissertation. Cornell University.
- Day, Clive. 1904 (1966). *The Dutch in Java*. Kuala Lumpur: Oxford U. P.
- Departemen Perhubungan, Direktorat Jenderal Pos dan Telekomunikasi. (ed.) 1980. *Sejarah Pos dan Telekomunikasi di Indonesia*. Vols. 1-5. Jakarta: Dep. Pos dan Telekomunikasi.
- Dipodiningrat, Asti. 1972 (1979). Sejaraha Ketoprak ing Ngayogyakarta. In *Javanese Literature since Independence*, edited by J. J. Ras. The Hague: Martinus Nijhoff.
- França, Antonio Pinto Da. 1970. *Portuguese Influence in Indonesia*. Jakarta: Gunung Agung.
- Francis G. 1895. Tjerita Njai Dasima. In *Tempo Doeloe*, edited by Pramoedya Ananta Toer. Jakarta: Hasta Mitra (1982).
- Furnivall J. S. 1939 (1967). *Netherlands India, A Study of Plural Economy*. Cambridge: Cambridge U. P.
- Geertz, Clifford. 1968. *Islam Observed, Religious Development in Morocco and Indonesia*. New Haven: Yale U. P.
- Geertz, Hildred. 1971. *The Javanese Family, A Study of Kinship and Socialization*. Glencoe: The Free Press.
- Gereja Tugu. (ed.) 1984. *Sejarah Tugu di Wilayah DKI Jaya Jakarta Utara*. Jakarta: Gereja Tugu. (mimeograph).
- Heine-Geldern, Robert. 1942 (1956). *Conceptions of State and Kingship in Southeast Asia*. Ithaca: Cornell University Southeast Asia Program Data Paper No. 18.

- Holt, Claire. 1967. *Art in Indonesia: Continuities and Change*. Ithaca ; London : Cornell U. P.
- Kartini, R. A. 1911. *Door Duisternis tot Licht*, compiled by J. H. Abendanon. Amsterdam : Gé Nabrink & Zn.
- Kementerian Penerangan, Jawatan Radio Republik Indonesia. (ed.) 1953. *Sejarah Radio di Indonesia*. Jakarta: Kementerian Penerangan.
- Kongko. 1955. Kroncong Jakarta. *Mingguan Nasional*. No. 10-12. Jakarta.
- Kornhauser, Bronia. 1978. In Defence of Kroncong. In *Studies in Indonesian Music*, edited by Margaret J. Kartomi. Center of Southeast Asian Studies, Monash University.
- Kristanto, J. B. 1977 (1983). Srimulat: Kesenian Kota. In *Seni Dalam Masyarakat Indonesia*, edited by Edi Sedyawati and Sapardi Djoko Damono. Jakarta: PT Gramedia.
- Manusama, A. Th. 1919. *Krontjong als muziekinstrument, als melodie en als gezang*. Batavia: G. Kolff.
- Moerton, Soemarsaid. 1968. *State and Statecraft in Old Java, A Study of Later Mataram Period, 16th to 19th Century*. Cornell University Monograph.
- Nagazumi, Akira. 1972. *The Dawn of Indonesian Nationalism, The Early Years of the Budi Utomo, 1908-1918*. Tokyo: Institute of Developing Economies.
- Nieuwenhuys, Rob. 1972. *Oost-Indische Spiegel, Wat Nederlandse Schrijvers en Dichters over Indonesië hebben geschreven, vanaf de eerste jaren der Compagnie tot op Heden*. Amsterdam: Em. Querido's Uitgeverij B. V.
- O'Malley, Willy. 1977. Indonesia in the Great Depression: A Study of East Sumatra and Jogjakarta in the 1930's. Ph. D. Dissertation. Cornell University.
- Palindih, Roestam S. 1930 (?). *Dasima, Kisah Lama Menuturkan Laggam Baru*. Yogyakarta: Kolff-Buning.
- Pigeaud, Th. 1967. *Literature of Java*. Vols. 1-4. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Pramoedya Ananta Toer. 1980a. *Bumi Manusia*. Jakarta: Hasta Mitra.
- . 1980b. *Anak Semua Bangsa*. Jakarta: Hasta Mitra.
- . (ed.) 1982. *Tempo Doeloe, Antologi Sastra Pra-Indonesia*. Jakarta: Hasta Mitra.
- Reitsma, S. A., (ed.) 1925. *Gedenboek der Staats- Spoor- en Tramwegen in Nederlandsch-Indië*. Weltevreden: Topografische Inrichting.
- Ricklefs, M. C. 1974. *Jogjakarta under Sultan Mangkubumi, 1749-1792, A History of the Division of Java*. London: Oxford U. P.
- Salmon, Claudine. 1981. *Literature in Malay by the Chinese of Indonesia, A Provisional Annotated Bibliography*. Paris: Editions de la Maison des Sciences de l'Homme.
- Schrieke, B. 1955 (Part I); 1957 (Part II). *Indonesian Sociological Studies*. The Hague: Van Hoeve.
- Selosoemardjan. 1962. *Social Change in Jogjakarta*. Ithaca : Cornell U. P.
- 白石 隆. 1984. 「進歩と自由——マス・マルコ・カルトディクロモの〈旅〉から」『東南アジアの政治と文化』(土屋健治・白石隆編) 東京大学出版会.
- Siegel, J. 1982. Functions of the Javanese in Surakarta. Ithaca (mimeograph).
- Smail, John. 1971. Indonesia : Social Change and the Emergence of Nationalism. In *In Search of Southeast Asia: A Modern History*, edited by David Joel Steinberg. Oxford U. P.
- Soekanto. 1952. *Sekitar Jogjakarta, 1755-1825 (Perdjandjian Gijanti ..... Perang Diponegara)*. Jakarta: Mahabarata.
- Soepomo, P. 1968. Javanese Speech Levels. *Indonesia*. 6.
- . 1969. Wordlist of Javanese Non-Ngoko Vocabularies. *Indonesia*. 7.

- Sutherland, H. 1969. *The Making of a Bureaucratic Elite*. Singapore: Heineman Educational Books.
- Taylor, Jean Gelman. 1983. *The Social World of Batavia, European and Eurasian in Dutch Java*. The University of Wisconsin Press.
- 土屋健治. 1971. 「サミン運動とインドネシア民族主義」『東南アジア研究』9巻2号.
- . 1982 a. 『インドネシア民族主義研究——タマン・シスワの成立と展開——』東京: 創文社.
- . 1982 b. 「植民地政府文書とインドネシア民族主義運動」『東南アジア研究』19巻4号.
- . 1983 a. 「ジョクジャカルタ——中部ジャワにおける〈みやこ〉の成立と展開——」『東南アジア研究』21巻1号.
- . 1983 b. 「インドネシアにおける政治と言語」『国際政治』74号.
- . 1984 a. 「19世紀ジャワ文化論序説——ジャワ学とロンゴワルシトの時代——」『東南アジアの政治と文化』（土屋健治・白石隆編）東京大学出版会.
- . 1984 b. 「カルティニの心象風景」『東南アジア研究』22巻1号.
- Van der Veur, Paul W. 1955. Introduction to a Socio-political Study of the Eurasians of Indonesia. Ph. D. Dissertation. Cornell University.
- Wolters, O. W. 1982. *History, Culture and Region in Southeast Asian Perspectives*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

(土屋 健治)